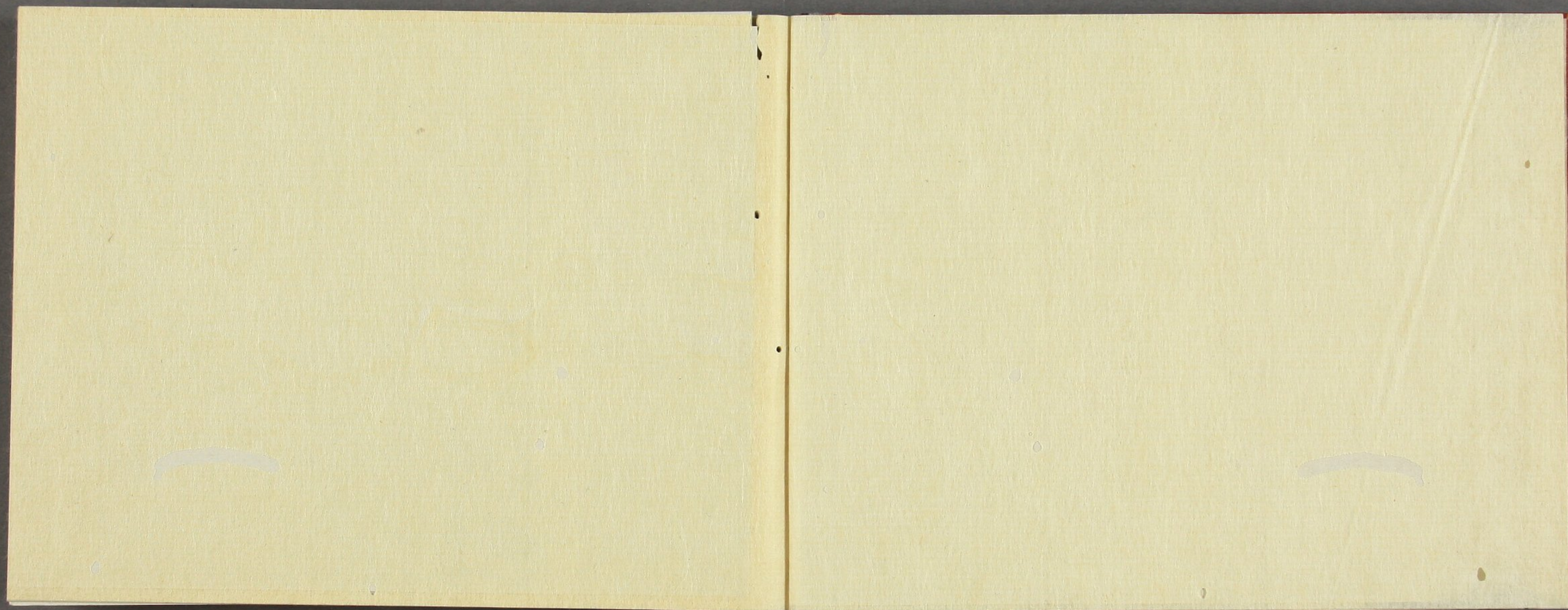




敏









栞枝

以詞為卷若

董宿合之後奇少將

名うしそりて栞枝

いしるありとあり

源氏抄九才正二頁の

事也



正徳のいとおもふ  
あまをていもんお母を  
あまのいとおもふ  
明正宮

着裳十二才

<sup>下</sup>うららの物緒は若原君乃  
あま宮十二才てきういさ  
裳もあまのうらら

正徳とおもふ二月

今上も十二才也

<sup>下</sup>冷泉院春宮時應和

三年二月廿八日沖元服

續日本紀曰延暦七年甲子

皇太子加元服其儀天皇

皇后并御茶殿令大納言

從二位兼皇太子傳若原

朝臣繼經中納言從二位

純朝臣船守等手加

其冠早昂執節而舞

<sup>中</sup>けま宮は朱雀院の皇子

七年十二月廿八日元服は



の御書はなほなりけり  
冷泉院の二月例と具  
る也

わそふりし 明石姫君  
の入内と云らばはんと也  
大尊の御書に云る

大宰大貳に一任五年

ありあつた也

<sup>秘</sup>大貳は洞也あり

此の御書は道と云る例也江師

吉房の御書に云る大学寮  
の孔子十哲の圖と道と

是也 此十哲は又庫に

ありし方治度焼也

焼也

樹下集に大入るなり

おありし御書なり

此御書の中は道雅千時大貳

末に云る御書は梅の

昔の御書に云る也



新編の事具に

昔のふおとら也南付に

年ふおとら也

あまあむかゝ 馬とあむか

よむ錦後がもあむか

ふおとら也

ふと錦がのふも一纏

坂院のふよのりかつ

<sup>下</sup>高素人 光原氏相とるを後

緋金錦 金錦にほむとる錦と  
金網の事

<sup>下</sup>定長年大使装束を

おと秋とら由出化ふたり

ひんま金網がの事也被金

倚もをり此を錦がをり

二合はいあむせ 昔との

よりかゝるあむに董也と

お古の事具とらして

二種は合をゆふ

をうらむ是にふむかばあむ

おとらむと <sup>下</sup>鐵白



香細揚着和供入職印  
揚五百杵と茅山太平觀託

うじまのあやうしと

了古事子大畧そんまとあり

願わねえと若うと

展遊書写し語こそと

承和菊といふ説ありけり

おも大素をたうと

黒業ねうと

こかく

中兼和仁明天皇の年号也

二の方といふ方と侍従其

二也

いそふといふ所也

里方侍従不侍男といふ

制禁ちといふ、源氏に

所といふ方と也

了馬方拾遺此方不侍

男身是承和作事也

うじまのあやうしと 此方と也



中興分上以 放出本

孝初王統天曆九年正月

二日於太皇太后河內院柏

殿西對南放出平敷之主

卿座南小對鋪以上東廂

西向南上敷四位座

又天曆九年三月九日車

駕幸朱菴院其殿裝

東母座放出南名對鋪

為主御座各置上敷大上皇

東向今上西向

又天曆九年二月十六日太皇

太后御柏殿設法花八講

七日奏朱菴院其殿放

出安置佛像列供具東庇

敷八僧座

又承平七年十一月十七日陽成

院七十御寶正殿西放出牙

三間五螺鈿倚子

小岩龍水觀九年正月二日



中宮大嘗其後二系院  
東對南放出三間儲公卿  
座北上對座之臺盤母座  
懸簾庇不懸之四位侍  
座在南廂西上水西

右以是示訛加料其謂  
放出者南向母座之者也  
河海曰庶者誤也所謂寢  
殿母座南北以畫之隔之  
所謂子之畫之也或以障子以  
之隔

南方為放出以水為內方  
南放出中立帳者有事  
之時撤之次東放出西放出  
トイフハ正殿為中央而東西  
各有殿謂之東對西對也  
寢殿與對之間有透液殿  
不及對座作之時東西  
構公卿座子午之間作  
以ケタルハ對代トイフ也東  
西對代也故東對母座ヲハ



東教出トイフ西唯之  
物徳若草卷ニモあるの  
おののやーのよんからん  
よがらーよんからん  
あつみあつみのしよーはあ  
たふく又いふからん  
よーのよんからんはあ  
えあしよーのよんからん  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ

まゝにさつしよーのよんからん  
あつみあつみのしよーはあ

右の徳よんからんはあ  
の事也はあつみあつみのしよーはあ  
の母屋はあつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ  
あつみあつみのしよーはあ



多々してそのむねは出帳と  
ふたつに別中に出帳と  
しては兼上のきこにたて  
ちかふに六条院の東の對  
のそむらうも源氏の居  
けし寝返ふともわかれ  
てあるを知らぬとて  
是に西對の殿出とあり  
とありは各別とあり  
はに西對の殿出とあり

西對のそむらうに  
とありあるを  
あはれ院は對を二あり  
とあり

八條のまつの出帳と

八條のまつの出帳と

皇子母從四位上滋野温子嬪主  
延喜元年薨高岩董初合也  
源氏一夫のあはれ出帳と

兼上の方ととも侍從  
方といはれぬ和の出帳と



の方からいへば人とはあつて  
〜と但し私とお好く  
私をも好むよらとつて  
人の意巧ガイウよよめて加減す  
事あるよよりて次第も  
えらふ事あるよよみ種の方  
も得男と兼和の心はま  
〜のせよは源氏の妻  
あそを好むよよりて  
所へは親と御しよ

ゆいよよあさー 源氏  
業上同方と細合あそ  
幸勝芳とよりて  
〜

人の心はま 源氏  
あそよよあさー  
あそよよあさー  
〜

あそよよあさー  
あそよよあさー  
〜











光梅苑と殿或は因也の  
糸少は結方造苑んこ  
或は云母苑献る心堂  
支統とんさう玄方とは  
瑞瑞の意は今松付梅苑  
と白瑞瑞の意は今梅枝  
付はあんこ一説云梅乃  
とある等か造苑は付  
と云お白の花の中は白  
梅を採て付るんこ

西宮抄菊苑宴の悟具心  
葉夜苑用組と梅心葉  
の松も梅も打枝のそり  
糸少て是りさ物こ  
心葉類衆雜要抄  
象眼の以てはツイニ  
金物付組の結は付り  
堂の口はホヒテ其上は  
蓋り加也今物梅は但  
け今物は不定物象眼



云々唐ノウス毛、色也  
膳具ノ上葉ニ又各別ノ  
物也

いさむきむさ、こむのり  
衣のあき口のまじ  
えむるもの、 兵ノ宮

の綱也

靴のこらひに一校子  
けなをさむ物に白しらも  
うぬらむ袖、あまの

ふじ、まよと靴かど昇下  
一ぬらむ

宰相中ね、リ方也

中  
こころののりのちの細  
長也女の装束に裳唐衣  
みまぬかや

その色のこ、お梅の色也  
ちよま、い、源氏の綱也  
くさく、く、曲隈、あまの  
よまのあまのふ、い、あ



宛のえふいしと

梅宛立ちよるゝとて宛あはれ  
人のとて母の書おそくあ  
梅宛書紙吹くゝとて宛  
いそそあはれ人あそん  
人のとて母の書おそくあ  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと

は母宛の宛合あつゝとて宛  
お付あつゝとて宛の宛あ  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと

源氏の宛あつゝとて宛  
合あつゝとて宛  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと  
はれ宛の宛いしと



秋好

みしるさるる ひとしむすあ

とみましくなれ

了 外人不見く可笑 白紙之京

源氏平下の御やけ明る如

君めこそみましくなれ他人

よさうかく思へ腰のひの事

秋好(かよ)

そくしと秋好(かよ)あはれ

秋好(かよ)あはれ

あはれ

かよ(かよ)あはれ

あはれあはれあはれ 細合

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

中宮よてちりぬ(かよ)

このはあはれよ 兵部(かよ)あはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれ



ふみんあきつ

了 董おにまうらふ白くさる

物やい何出さようり或い

花あふちまうらむは故わ

ふいふちあふぬあをせん

下 君も今誰まのこせん梅紀

色紙しんまを命し

董お勝芳をまふぬあ

まふふえ 無る言詞也あ

まぬ詞まぬぬり

ふりあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあ

一 昭兵衛言もあまら

よふあふあふあふあ

日あああああああ

道新のあまのあの中と一昭

よくあああ

一 あああ 今あああああ

あてにああああああ

ああああああああ



石を陣のこころ水めはらふ  
今この終也  
石を陣のこころ水めはらふ  
御溝水  
近來東庭源後任梵

石を陣のこころ水めはらふ  
今この終也  
石を陣のこころ水めはらふ  
御溝水  
近來東庭源後任梵

流上言或内流極也流非  
一脈且古立石等有籬砌  
也順德院御抄

兼和山阿左の陣の山溝  
色地よりつる後代お作  
て其所とてつる也

丁忠朝片方之里方侍従  
春秋五日夏二日冬七日  
埋樹下也

山建之山の宰相のこ



惟光参議は但しるす事

ありしをいふなり

任参議有教近其内歴

七十五受領合格之吏助

云文若孫参議と惟光

前攝津守也

兵束のそと しが音に

ありし也

とくもいふこと

兵束の宮組 迷惑あり

判若しありし事無しの説

人のいふ事 因方とて

西のいふ事ありしが深

あるを各別の旨いふ事也

よきありし事

舟院のいふ事なり 淨土も

業としていふ事ありし事

いふ事ありし事なり

いふ事ありし事なり

いふ事ありし事なり



事をもて董氏の家より

そゆり

侍従いよりの御

侍従と云ふ人いよりの

そ申す侍従の御

ゆり

いよりの御いよりの御

業上いよりの侍従の御

死を御して種也

いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御

御いよりの御いよりの御



あゝも梅の花

うらやまをこぼし

命の如く

うらやまをこぼし

あゝのまよふ

うらやまをこぼし

うらやま

かえりて

うらやまをこぼし

うらやま

うらやま

うらやま

うらやま

うらやま

うらやま

梅の花

うらやま

うらやま

うらやま

うらやま



明石に頼むしあしよ

思ふふあは

くのみこく 薫家香也方

おのみさう

さきの朱権院のこ

け<sup>中</sup>の烟あまこの意あり

河海に思ひえそよこく

薫家香也百歩香がよ

よん<sup>中</sup>思ふよそん<sup>中</sup>あし

あし<sup>中</sup>思ふよそん<sup>中</sup>あし

け<sup>中</sup>の薫家香也のこ

あまを<sup>中</sup>都<sup>中</sup>く<sup>中</sup>思<sup>中</sup>出

き<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>それ<sup>中</sup>い<sup>中</sup>そ<sup>中</sup>ん

け<sup>中</sup>り<sup>中</sup>し<sup>中</sup>の<sup>中</sup>前<sup>中</sup>朱<sup>中</sup>権<sup>中</sup>院<sup>中</sup>の<sup>中</sup>薫<sup>中</sup>家<sup>中</sup>香<sup>中</sup>也<sup>中</sup>

の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>思<sup>中</sup>胡<sup>中</sup>古<sup>中</sup>を

その<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>は<sup>中</sup>け<sup>中</sup>ん<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>を<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>に

達<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>朱<sup>中</sup>権<sup>中</sup>院

の<sup>中</sup>薫<sup>中</sup>家<sup>中</sup>香<sup>中</sup>也<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>に

思<sup>中</sup>胡<sup>中</sup>古<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>に

思<sup>中</sup>胡<sup>中</sup>古<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>に



ふにおゆるも氣のそく  
園遊もして白雲もといふ  
一方よはてむしりさる  
是は子に兼薩院の萱衣  
鳥と兼却片の白雲香  
と二種と明石とあはせぬ  
とぬく——白雲香に四葉  
大納言の家より出くさう  
ふたれ兼和百雲もと  
うら守信に昔よりわあの方

うらに忠孝のふたはら  
らんまもいしりあはあ  
そおひえていふ別梅  
花若葉がいのれと  
あそあう——あそあ  
明石のうにひのふと  
思ひ出たあそあ  
思ひえていしりあ  
薩院の兼平のふたはら  
宮抄臨時のふたはら



初出大内之時、京令筋  
檣柳、といふ、朱藤院の  
字多、少、の事也、承平の  
と朱藤院と、かよはせし  
字多、大、自、と、お、の、字、と  
く、て、か、ゆる、は、也、結、は、  
又、朱藤院、と、南、と、よ、あ、  
承平の、と、お、朱藤院、  
か、也、の、子、耐、の、是、却、也、  
お、方、か、と、あ、え、ら、り、し、也、

は、(お)と、む、と、か、と、  
名、無、種、し、の、事、も、し、  
り、し、た、と、お、の、事、  
毎、下、と、あ、り、し、也、  
善、悪、に、し、く、と、あ、り、  
又、し、と、し、り、し、  
好、ま、り、判、を、あ、り、  
と、あ、り、  
か、し、し、し、し、し、し、  
と、あ、り、し、し、し、し、



ふたりの月の上 雨のさめ  
けしき 葉の風をひらいて  
きく

花人所 花人所 花人所  
六葉の夜よ

あふみのあそび 花のさめ  
花散れあふ

花のさめ 花のさめ  
花は花のさめ 花のさめ  
花のさめ 花のさめ

也琴草比巴 和琴を  
花のさめ

あつた花のさめ 花のさめ

あつた花のさめ 花のさめ  
あつた花のさめ 花のさめ  
あつた花のさめ 花のさめ

あつた花のさめ 花のさめ  
あつた花のさめ 花のさめ  
あつた花のさめ 花のさめ  
あつた花のさめ 花のさめ



梅枝のしるし 梅枝のしるし

依之る老若

梅えふはあはれきき

とれはあはれきき

とれはあはれきき

とれはあはれきき

ちふふふふふ

柳の若きあり 年の若

の若きあり 年の若

あはれきき

とれはあはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき

宮中あはれきき







我横笛の音は  
きしよの洞の音は  
しよの洞の音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は

あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は

あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は

あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は  
あやうき音は



ゆきあけのふゆあけ

花のこえかゝぬ袖よ

やえりぬ艶かぬよ

うき袖(三)早下の綱

一流えかぬいもかぬ

花のまに草花(えかぬ袖

に流女のまに水吉花也

かゝり流花もいもいも

あゝあゝあゝあゝあゝ

言も衣草花の流花もいも

謝もいもいもいもいも

の流花もいもいもいも

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ







あつたてのうへにうらなひの  
まじり

あつたてのうへにうらなひの  
まじり  
あつたてのうへにうらなひの  
まじり

あつたてのうへにうらなひの  
まじり  
あつたてのうへにうらなひの  
まじり

あつたてのうへにうらなひの

まじり  
秋好中宮の坤の辰也

あつたてのうへにうらなひの  
まじり

あつたてのうへにうらなひの  
まじり  
あつたてのうへにうらなひの  
まじり

あつたてのうへにうらなひの  
まじり  
中宮と山對面也







よきかゝるのしるしのあはれ  
大輝の可なりやこの御式に  
かゝる御式にふかふか  
のまに御事なする事と  
孝宮御元服 孝宮しと十  
こたせ  
この夜のおまつりも 御事の  
始君女御の御事と  
よき御事と  
皆打豫しと  
や

たのむ 秦京殿女御  
はな枝枝たはなは系圖外  
のしる  
たはな 系圖外の  
御事にはついでに  
宮内御事と  
か入内ありて  
御事と  
御事と  
御事と  
御事と  
御事と



嬢姑の意地かして苦  
のうまー 嬢姑の意地かして苦  
に 嬢姑の意地かして苦  
さう 嬢姑の意地かして苦  
嬢姑の意地かして苦  
のうまー 嬢姑の意地かして苦

入内廷のあま 嬢姑の意地かして苦  
嬢姑の意地かして苦  
よ入内廷のあま 嬢姑の意地かして苦

人 嬢姑の意地かして苦  
嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦  
明 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦

い 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦  
は 嬢姑の意地かして苦



母更に後任のひ又源氏の書

司かひし一也

宮ふえ 春宮好く

罪

もの志すか。細宮の

くわくもくをくをくを

くわひぬや

わそ中にも その中にて

手申にたるるをくを

くわもくをくをくを 正隆

よら川の事むし

世果よ源氏のりり

江法云天仁二年八月日向

小一系亨言法之次同云

假名手本何時始起手

又何人所作か答曰弘法大

師所作の件事無不見

但太后自手假名法華

經修養之時被以心講

之講師南小英才相逆



為導師高名清範慶  
祚亦之輩各振富樓那  
之弁戈之後源信僧初又  
勤以事說云日本國誠  
雖為如來之令言唯以假  
名可奉書也弘法大師云  
傳習法志云梵字悉曇  
亦密法之後寄回教法門  
作不只云云讀給以來  
一切法門聖教史書經傳

不離其讀文字不只字  
色白上云也 不說他事  
只以一事令講人皆學耳  
之由所傳事也古人日記中  
有此事云云又曰云然者件  
弘法大師以時以從無假若  
然日本紀中假若日本紀  
有之也意外可見也  
此事在理也假若只付倭  
書令書也假若口云者彼



時始知之 一説伊呂波有三  
明イロニホトナリスルシ安  
寺護命僧正作ワカコタシ  
吾モセスニテ弘法大師作  
京成説慈覚大師云々  
ハト母字也能ク梵字の字  
母ハ母也云々性古ノ和語ハ万  
葉書日本紀云々様ニ書云  
也云々

高右衛門書

漢藏天竺弘法師 敏行作  
美材有託 前中書王兼明道風本名  
佐理大貳後中書王具行成待從  
多ふおつてもいふとやうや

とらわれいぬたうそをまふあや  
てとまの(上右と)いおわりて

とらり  
あふと しの假名

中宮殿いぬたうそ 六条河原  
あふといおわりて







優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

優柔なること

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の

西條の



はねまのくまのくま  
下(ゆき)

くまのくまのくまのくま  
慢一(ゆき)

下の洞(ゆき)のくまのくま  
あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま  
あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま

あ(ゆき)のくまのくま



Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

Handwritten text in cursive script, consisting of several lines of text.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

Handwritten text in cursive script, consisting of several lines of text.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.







命文子丁儀

正しくおぼしめし先  
 漢の武帝の御世に  
 正しくおぼしめし先  
 消息を承りて

あり  
 正しくおぼしめし先  
 事と相成り思ふ  
 正しくおぼしめし先  
 正しくおぼしめし先

正しくおぼしめし先

宰相申す所の文の無事皆

宰相申す所の文の無事皆

宰相申す所の文の無事皆

あつておぼしめし先

或はあつておぼしめし先

信よ書ふ字を正しくおぼしめし先

正しくおぼしめし先

正しくおぼしめし先

正しくおぼしめし先







くまのむねへいりてきく

か

あつちのむねへいりてきく

くまのむねへ

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへ

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへ

あつちのむねへいりてきく

あ

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへいりてきく

あつちのむねへ

あつちのむねへいりてきく











言の海女と云ふ海女の  
歌

の *Omikoto* といふ

いふにあらう *かき* 字書

海女の *omikoto*

ち *omikoto* といふ *和* *omikoto*

お *omikoto* といふ

海女の *omikoto* といふ

*omikoto*

いふの海女 *omikoto*

海女といふ *omikoto*

<sup>中島</sup> *omikoto* といふ *omikoto*

*omikoto* といふ *omikoto*

いふの *omikoto* 紙色紙

*omikoto* といふ

いふ *omikoto* といふ *omikoto*

真に東帯 *omikoto* といふ

依 *omikoto* 行 *omikoto* といふ *omikoto*

走 *omikoto* 解 *omikoto* といふ *omikoto*

解 *omikoto* といふ *omikoto*



張芝字伯英善草書  
絕妙時人謂臨池水盡思  
後漢書仍張芝之草聖也

号ス

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



とくまのまゝにふんじのまゝに

あまも

年よりまゝの神とていふ

まゝにまゝにまゝにまゝに

はまのたつたつたつた

松とくまのまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに



の書(のり)

いふに似し、あつた女  
ちのつとむる神也

又よ(あま)い(い)ひ(ひ)あ(あ)り(り)  
お(お)も(も)い(い)の(の)お(お)も(も)い(い)

又字極し、あまの石(い)の  
神(かみ)も(も)あ(あ)り(り)も(も)あ(あ)り(り)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)  
あ(あ)ま(ま)い(い)

き(き)こ(こ)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い) 可(か)ク(く)ク(く)ク(く) 無(む)之(之)威(い) 威(い)威(い)威(い) 化(け)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)

し(し)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い) 弄(りやう)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)

御子の侍従して、あまの宮

の字侍従也

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い) 卷 ニ(に)ク(く)ク(く)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い) 紙(し)

あ(あ)ま(ま)い(い)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い) 糸(いと)家(け)本(ほん)の(の)あ(あ)ま(ま)い(い)糸(いと)



新編のいふところを問書と  
さのいふところを万葉集  
と假名よみえに注し  
とよみえといふといふこと  
あり又或抄より古万葉集  
古字より正字なり  
古万葉集ともいふ下  
云ふ所の万葉集と云ふ  
一谷合点と  
私云古イニハト云ふ字あり

のいふところを今古万葉集  
といふ所をいふ  
万葉集廿卷聖武御代  
撰之或説三万葉抄五卷  
貫之撰之是以後の撰  
順集云天曆九年宣旨  
ありてとて大和をえ  
ぬ和名をよむとせし古万  
葉集よむとていふとて  
やれとてとて和名をいふ所



清原元輔の江掾純時文  
学生源順の書所の預坂  
上野城之たとすは原郡  
何事と云ふ所の別高は

女名

中  
万葉集一部七卷平城卷  
詔侍官撰之見古々序  
又万葉集五卷一統純貫  
之撰之一統純貫五卷  
因古卷抄不知撰者は

暖蔵の撰四卷目六中巻  
但し一統純貫の撰  
いふこと自筆のゆかり  
可なりといふを如くは  
多らぬ

定教の撰の 定教の撰

定教の撰の撰  
定教の撰の撰  
定教の撰の撰  
定教の撰の撰  
定教の撰の撰



ふじのふくこ 辰のくさ  
啄木のねんおれとて  
らへんに海草のくさの軸  
さうかむ

ふじのふくこの 丁 昔徳書  
ハ昔様よ 狩とて書を  
と我々、年更な 種の時  
ある行成、十二の極と書  
字がなとて

ふじのふくこ

南軒のふくこ、  
かよ  
おそくは 源氏のふくこ  
ぬれ  
ふんちのふくこ 辰のくさ  
ふじのふくこ、辰のくさ  
無常のふくこ、辰のくさ  
辰のふくこ、辰のくさ  
辰のふくこ、辰のくさ  
辰のふくこ、辰のくさ  
辰のふくこ、辰のくさ



まうてくらぬま 吾々の宮  
女をうたへておなげな  
ふらぬらう

侍従子 源氏の返報之唐

本書籍也

てくともおなむら上中カニナカニ

このふまこ 御ら申宮の

ゆめあのみい也

人のこらま

是に唐太る葉がたも

大切なる書家やある

中は一紙のわが

御あらんおの

のまの日記

絵合よにさるあうの

あをてこそ出されま

日記あるま

まの日記とあまに絵合

よをたれあをたれこ

ふらぬらうあをたれ







内務省事務官 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原

菅原 菅原

菅原 菅原

菅原

菅原 菅原

菅原 菅原



おんてん

いづの事かこゝをばとく人  
かこゝをば教よの海女の昔  
桐葉音のよ教訓よを  
あぐの事かこゝをばとく人  
るゝもやされりて言は  
教訓よをばとく人  
いよよよよよよよ  
洞とまもくしよよよよ  
いおんてんあふおんてん

いづの事かこゝをばとく人  
かこゝをば教よの海女の昔  
桐葉音のよ教訓よを  
あぐの事かこゝをばとく人  
るゝもやされりて言は  
教訓よをばとく人  
いよよよよよよよ  
洞とまもくしよよよよ  
いおんてんあふおんてん







いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌

いんげん豆の歌



居後氣養後體

とく

とく

著

か

とく

とく

とく

とく

西白意

とく

とく

とく

とく

とく

とく

とく

とく

とく

本肝要











ふふふふふふふ

ゆいゆいゆいゆい

ふふふふふふふ

りきりきりきり

ゆきゆきゆきゆき

ててててててて

ふふふふ

きりきりきりきり

ゆきゆきゆきゆき

ふふふふふふふ

ふふふふふふふ

ゆいゆいゆいゆい

ふふふふふふふ

ゆいゆいゆいゆい

ふふふふふふふ

ゆいゆいゆいゆい

中務官さん

ふふふふふふふ

ふふふふふふふ

大坂おもしろい



中務官より源氏へ  
お知れ申すある也

おまの御人へ 致仕書  
まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし

まよひ夕暮をまよひし  
まよひ夕暮をまよひし



あつちのあつちのあつち

あつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち 始

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち







おの領の御事申上る候  
ありしに御事申上る候  
うらやまの御事申上る候  
おの領の御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候

おの領の御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候

外へ御事申上る候  
おの領の御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候

おの領の御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候  
しるし御事申上る候







故にかくては  
世に事してさてもおれ  
ては治定とせざる事  
と治定一あるやに  
ありて公家くして  
とありて公家くして  
ふに公家くして  
こきより公家くして  
ふに公家くして  
傾奇は不審しき也



